

行政視察報告書

令和6年10月21日（月）～23日（水）

社民党土浦

平岡房子

- 1 テーマ 廃棄物収集効率化事業（収集しマース）について
- 2 視察日時 令和6年10月21日（月）13:30～15:00
- 3 視察地 北海道室蘭市
- 4 目的 ・廃棄物収集の方法について、民間の活力をどのように導入し、効率化と経費の削減をどのようにしているのかを学ぶ。
- 5 内容 ・収集しマースの説明
- 6 取り組みの概要

(1) 室蘭市の概要

室蘭と言えば鉄鋼のまち、社会科の教科書には例外なく出てくるまちである。昭和45年には、人口は16万人を超えていた。今でも、多くの工場が稼働しているものの、人口は最盛期の半分、約7万5千人となってしまった。

居住区域の規模はそのままに、人口減少により労働力の不足が深刻化している現状がある。

(2) 「収集しマース」について

廃棄物収集事業において、各自治体では、人口の減少による廃棄物収集に従事する人の高齢化と減少、収集の多様化と住民の多様化、災害時のがれき等の収集、脱炭素社会に向けての取り組みなど課題は山積みである。

そこで、室蘭市では、パナソニックITS株式会社と連携して、同社の廃棄物収集効率化サービス「収集しマース」を導入し、実証実験を行っている。

方法は、自治体や事業者においては、廃棄物収集の今を把握し、蓄積したデータを分析、持続可能な廃棄物収集体制の構築に繋がる管制アプリを、清掃担当者においては収集業務の様々な状況や情報をリアルタイムで共有し、ナビ機能により誰でも安全に効率よく収集可能なタブレットアプリを導入するものである。

その実際は、廃棄物収集車にはタブレットを搭載し、担当者は、集積のたびに実績を入力する。これを蓄積することにより、収集のための最適ルートが導き出され、初心者でも最短ルートにより回収することが出来る。また収集車同士の情報共有により、未回収が防げる。業務レポート（日報）の作成にも繋がり、住民への情報公開が出来る。また入力情報から、効率よく収集できるエリアの再編が出来る。等々たくさんのメリットがある。

成果としては、作業時間が850時間削減され、走行距離が12,584km削減することが出来た。また、業務レポート（日報）の自動生成により作業効率が上がり、収集漏れがなくなった。

この結果、事業者、行政側双方にゆとりが生まれたそうである。現在は、家庭系の廃棄物収集での取り組みだが、事業系廃棄物にも取り組んで欲しいとの要望があるそうである。

7 質疑応答と体験活動

(1) 質疑応答

質問：市民の評価はどうなっているか。

回答：まだ施行期間ではあるので、きちんと評価をもらっていないが、完了した時点で市民の評価をもらう。

現状では、ゴミの出し方について市民の意識が変わってきている。集積所の削減にも協力を要請しているが、理解が深まっている。

8 土浦市の政策に生かすには

説明の最後に講師の方から、土浦市における「収集しマース」システム導入の試算が提示された。当然、土浦市においても経費の節減になることは、間違いのないことであった。

土浦市でも、今後の人口減少と労働力不足は間違いなく起こってくることであり、こういったシステムの導入は、近い将来取り組んでも良いのではないかと思った。

- 1 テーマ 農福連携ネットワークについて
- 2 視察日時 令和6年10月22日(火) 13:30~15:00
- 3 視察地 北海道恵庭市
- 4 目的 ・農業分野における障がい者の就労促進の取り組みについて学ぶ
- 5 内容 ・農福連携ネットワークについての説明
- 6 取り組みの概要

(1) 恵庭市の概要

恵庭市は北海道の西部、新千歳空港に近く、交通アクセスの良さと穏やかな気候風土に恵まれ、早くから住宅地整備、都市基盤の整備を進めてきたことから、市制施行の昭和45年から人口が約2倍となったまちである。また、市の面積のおよそ半分が森林地帯であり、4分の1が農業地帯である。

穏やかな気候により、米作り、野菜作りが盛んで、カボチャ、ブロッコリー、アスパラガス等が重点的に作付けされている。

(2) 農福連携ネットワークについて

農業が盛んなまちではあるが、農業従事者数、農家戸数は年々減少している。反面、一戸あたりの耕作面積は増加しているので、農地がだんだんと集約され、大規模農家が増加したことになる。これは反面、農業従事者の不足にも繋がる。

恵庭市では、平成27年より、障がい者が農業分野において活躍することで、自信や生きがいに繋げ、社会で活躍して欲しいと、農業実習を試行的に行ってきた。翌28年には「恵庭市農福連携による障がい者等就労促進ネットワーク」を設立し、行政機関、農業関係者、福祉関係者が一体となって、農福連携を進めてきた。

現在は、農業者、福祉事業所、関係団体など16の法人・団体が会員となり、市では、経済部農政課、保健福祉部の福祉課・障がい福祉課が事務局となって活動している。

農業者は、福祉事業所に農作業を依頼、福祉事業所は、農作業を受託し農場への送迎や作業の指導を行う体制を整えている。

取り組むに当たっては、ネットワーク会議を年に1~2回開催して情報交換や活動について協議をする。障がい者個人の適性や能力には差があるので、作業内容、賃金(工賃と言っている)など、農家とのマッチング活動を丁寧に行う。担当者が現地を見学して、課題の共有、情報交換を行う。農福連携による地域づくりのためのシンポジウムを行う。など丁寧な活動に取り組んでいる。

7 質疑応答

障がい者もその障がいの程度に応じて働き、賃金を得ることは、生きる喜びと社会の一員としての責任を身をもって知ることになる。これは自立の第一歩であり大変重要なことである。

社会から必要とされる働きをすることは、障がいを持つ人々の人生を豊かにするものであり、今後の取り組みに期待するとの感想を述べた。

8 土浦市の政策に生かすには

土浦市においては「つくしの家」ほか、民間の授産施設が多数あるが、現状では、農業と連携した取り組みは無いように思う。農作業をするには、指導員等作業に付き添う職員の養成が必要であるし、農業者自体が人手を必要としているかも調査しなければならない。

市として取り組むには、もう少し調査研究を進めなければならない課題だと思う。しかし将来的には、農業の人手不足は間違いなくやってくる課題であるし、障がい者の自立と社会進出にはこの取り組みは必要になってくるのではないかなと思われる。

恵庭市は、自らガーデンシティと銘打っているが、大きな道路沿いは、美しい花で飾られ、とても良い印象を持った。

- 1 テーマ 空き家対策事業について（空家除却費補助金、空家取得費補助金について）
- 2 視察日時 令和6年10月23日（水） 10:00～11:30
- 3 視察地 北海道伊達市
- 4 目的 ・全国的に深刻化する空き家対策について、伊達市の取り組みについて学ぶ。
- 5 内容 ・空き家対策についての説明
- 6 取り組みの概要

(1) 伊達市の概要

伊達市は北海道中央南西部、札幌市と函館市の間部に位置し、噴火湾に面する伊達地域と飛び地である大滝区とで成り立っている。

伊達地区は、対馬暖流の影響で四季を通じて温暖で、降雪量も少なく、農作物も豊富であり、反対に、大滝区は内陸性気候で、積雪量も多い。伊達地域での農産物は100品目200種が栽培されている。道の駅での売り上げは7億円に達する。

人口は減少しているが、世帯数は大きく減少していない。若年層の減少により、高齢者の割合が増えている。

(2) 伊達市における空き家対策について

若年人口の減少と割合としての高齢者の増加により、空き家の件数が増えている。職員や業者により調査した結果、平成27年に510棟だったが令和4年度には976棟となり、ほぼ倍増している。

この空き家を活用して、移住・定住の促進をと言われるが、建物が古い、所有者の同意が得られないなどの理由で困難な状況にある空き家、売りたいくても資産価値がないので売れない空き家も少なくない。

そこで、伊達市では、この空き家の購入や持ち主が解体するための費用の補助を始めた。

<平成29～30年度> 不良空き家住宅除却補助 最大50万円

<平成30～令和2年度> 空き家改修補助・賃貸用戸建て住宅にする場合 最大150万円

・自己の居住用戸建て住宅にする場合 最大200万円

空き家解体費補助 ・一般空き家 最大 30万円

・不良空き家 最大 70万円

<令和3年度～> 空き家取得費補助 最大100万円

空き家除却費補助金 ・一般空き家 最大 40万円

・不良空き家 最大 70万円

補助実績としては、最多は平成31年の18件で、年度によってまちまちである。

7 質疑応答

感想として、伊達市では、将来の空き家を未然に防ぐ方策を立てるとともに、空き家除却の費用負担をすることで、持ち主に対し、この際だから除却しようと促す意味合いもある。行政代執行をするよりは費用負担が少なくなるとの考えからこの補助金制度を取り入れたそうだ。長期スパンで考えるとその方が支出が少なくなるそう。なるほどと思った。

8 土浦市の政策に生かすには

土浦市においてもこの空き家問題は深刻になりつつある。すでに空き家対策への予算は確保しているが、それは啓発や対応が主である。

伊達市では、空き家除却のために一般財源から費用を拠出し、除却費用の一部を負担する具体的な策を講じている。除却費用の一部負担は、市がやってくれるかもしれないという期待感に繋がることもあるが、除却したくても費用負担があっても出来ない市民にとっては、助かることであろう。

研究していかなければならない課題だが、将来的に取り入れていくことも必要になってくるのではないかと考えた。